エッセイスト

春口　敏栄

HARUGUCHI TOSHIE

1961年 柏崎市出身
2021年「呑んべぃ親父の独り言」を自費出版
2024年「彫刻師 小川由廣を探して」
「続・呑んべぃ親父の独り言」を自費出版

地元新聞紙上で人気のコラム「呑んべぃ親父の独り言」を執筆するエッセイストの春口敏栄さん。60歳の時に200話分のコラムと連載外の随筆6話をまとめた「呑んべぃ親父の独り言」を自費出版。今年1月には「彫刻師 小川由廣を探して」を、さらに5月15日に「続・呑んべぃ親父の独り言」を出版した。

今では地元だけでなく、市外、県外のファンも多い春口さんのエッセイ。タイトルの「呑んべぃ親父の独り言」には「酔っぱらいのたわ言」という意味が込められていて、「私はこれが楽しいのだよ」という言葉が締めの決めゼリフ。楽しく読んでもらえるようにと面倒な言葉は使わず、自身の日々のつれづれや子供の頃の風景、柏崎のさまざまな歴史や人物のことなどを分かりやすく、親しみのこもった文章で生き生きと描かれている。

これまで地元の企業で働き、子育てやPTA活動に奮闘してきたと話す春口さんは49歳で普通二輪免許を取得しバイクデビュー、50歳で大型二輪免許を取得。52歳でジョギングを始め、柏崎潮風マラソンでハーフを完走。53歳でフルマラソンの42.195㎞を完走している。55歳のある朝、目を覚まして「物書きになろう」、そして「60歳で本を出そう」と突然思ったという。たまたま目に入った市民文化誌の随筆の部へ応募しようと書いてみたところ3編が仕上がった。春口さんはそのうちの1編を応募し、残りの2編を地元新聞社へ投稿した。新聞社からはすぐに連載申し入れの電話があり、翌1月から月1回の「呑んべぃ親父の独り言」の連載が始まった。連載はすぐに月2回、そして週1回に増え、これまで7年間、休むことなく続いている。

ちなみに、市民文化誌へ応募した作品はその年の最優秀賞になり、今年も春口さんの作品は最優秀賞を受賞している。

思い起こせば、友人たちとのツーリングで見つけた史跡や名所がエッセイのネタになり、マラソンを通じてつながった人たちからは食べ物の話題など、さまざまな情報が春口さんの元へ寄せられる。「趣味で繋がる多くの人たちから応援を頂いている」と笑顔を見せる。

春口さんの講演では、戊辰・鯨波戦争で柏崎に集まった偉人や柏崎商人、越後古図から見る歴史と防災の話など、これまで丹念に調べまとめてきた内容が語られる。柏崎の彫刻師・小川由廣のライオン像もその一つ。上越市文化財・旧直江津銀行前のライオン像が知られており、地元では名工と称賛される。柏崎市域にもまだ、かろうじていくつか彫刻は残り「小川由廣をきっかけにまち歩きができる。ライオン像は柏崎の貴重な観光財産になる」と春口さんは期待している。

▲わたじん書店、尚文館書店、市役所売店、文化書院、夕海にて販売中

Facebook